哈爾濱市（ハルピン市） その2　ハルピン市内観光

寺西 俊英

7月20日、大連北站を出たときは低い雲が垂れ込めていたが、ハルピンに着くころには空はすっかり晴れ渡っていた。迎えに来てくれた友人に聞くと今日は気温が32度くらいまで上がり、明日も同じような天候だという。まったくこれでは避暑どころの騒ぎではない。大連は着いた翌日から小雨が降ったり止んだりで凌ぎやすかったが、ハルピンはかなり内陸にあるとは言え「いくらなんでも」と文句の一つも言いたくなる。これで真冬には零下30度になるというからこの地に住んでいる人に同情したくなる。

哈爾濱西站からタクシーでまずホテルに向かう。予約したホテルは“IBIS ホテル”で中国名では“宜必思哈爾濱索菲亜教堂酒店”と長たらしい。住所は哈爾濱市道里区兆麟街92号である。小奇麗な部屋で空調も完備しているが、なぜか冷蔵庫はない。

ホテルの前の道路を挟んで鬱蒼と木々が生い茂る公園があった。地図で調べるとこれが「兆麟公園」で、友人によると抗日戦士として活躍した李兆麟（1910年～1946年）からその名をつけたとのこと。ホテルも彼の名をとった兆麟街にある。ホテルの隣の建物の一部には、兆麟記念館もあった。

ソフィア寺院の前で

彼は、遼寧省の生まれで、日中戦争時代主として東北地方、とりわけハルピン中心に抗日活動を展開。1946年に暗殺されたがその功績を称え公園の名前も兆麟公園に改め、この地に埋葬された。公園の中には記念碑と胸像が設置されている。今回ではじめて兆麟公園とその謂れを知ったのであるが、旅行社はいいホテルを予約してくれたものだと感謝した。後述するが、市のシンボルである「中央大街」や「ソフィスカヤ寺院」にも歩いてすぐのところにある。中央大街を北に歩くと松花江や斯大林（スターリン）公園に行きつく。

荷物を置いてまずはソフィスカヤ寺院に向かった。ホテルの中国名の一部に“索菲亜（ソフィア）教堂”とあるが、これがソフィスカヤ寺院のことである。この寺院を見るのは今回が3度目であるが、いつ見ても荘厳で美しい。高さ53メートルの巨大なタマネギ型のドーム屋根とそれを四方から守るかのようにいくつかの三角錐の尖った屋根とのコントラストが素晴らしい。それぞれの屋根の先端には金色の十字架が屹立している。焦茶色のレンガ造りの外壁に対して、紺碧のドーム屋根と尖塔の屋根、陽に映える金色の十字架は何度見ても飽きることがない。ビザンチン様式で建てられたロシア正教の教会であったが、現在は建築芸術館として利用されている。中を見たかったが、行ったのが午後4時半過ぎですでに閉館となっていたのが残念であった。ロシア正教の教会は以前25か所を数えていたらしいが、現存しているのはこの教会とウクライナ寺院の2か所だけらしい。

なんども後を振り返りながら、中央大街に向かった。この通りも3度目である。ハルピンは1898年に帝政ロシアと清朝間で結ばれた「遼東半島租借条約」により、東清鉄道の敷設が許可されて以降、ロシアによる街づくり・鉄道づくりが始まった。ハルピンはその中心となって発展し、人口が急激に増加し一挙に近代都市に変貌した。欧米各国の企業も進出、現在も残る欧風建築が数多く建てられた。そして“東方のパリ”と呼ばれるようになった。それらの建物が多く残っているのが「中央大街」である。

当時はロシアが中心となって開発したのでこの通りは「キタイスカヤ通り」(ロシア語で“中国人街”との意味)と呼ばれた。新しく建てられた建物もいくつもあるが、全長約1500メートルもの通り全体がレトロな雰囲気を余すところなく醸し出している。一つには通りがすべて石畳であること。それから都市条例で6階以上の建物が禁止されているためであろう。

日本はすこし進出が遅れたが、 満州国(1932年建国)時代には多くの日本企業が進出した。バロック様式の旧松浦洋行のデパート(現在:新華書店)は、赤いドーム屋根のあるもので当時のハルピンでは一番高い建物であった。

この通りで最も有名な建物は、モデルンホテルである。1913年に創建されたが、ハルピン一の格式を誇り当時の人々の憧れの的であったようだ。全館を薄いピンクで装い、欧風なユニークなデザインである。正面玄関の上部には2階と3階にテラスが設けられ、そこから中央大街を行き交う人を眺められる。歌手の故淡谷のり子がハルピンに来るたびに泊まったそうで、孫文の妻の宋慶齢も名を連ねている。有名人の定宿だったようだ。今年で丁度築100周年を迎えるが、内部は2007年にリニューアルされ、さらに人気の高いホテルとなった。次回ハルピンに行く時は、必ずこのホテルに泊まりたい。

道の両側に次から次へと現れる歴史的建造物を楽しみながら北へ足を運ぶ。夕方6時になろうとしていたがまだ日は高い。中央大街が尽きるころ、左右に走る大通りを地下道でくぐって上に出ると前面に高さ20メートルはあろうか、筒状のモニュメントが見えてきた。筒の上方は何人かの人々の彫刻が乗っかっている。モニュメントを囲むように5メートルくらいの柱が半円状に等間隔に30本程度立っている広場に出た。

モニュメントの台座には、〈哈爾濱市人民防洪勝利紀念塔〉と大きな文字で書かれたプレートが取り付けられていた。1957年に松花江が氾濫し、大きな被害が出たそうだ。 その大洪水を記憶に留めるために造られたというが、自然災害でも何でも乗り切った時、「勝利」という言葉を使うのが好きな中国人らしいネーミングの紀念塔である。

中央大街(キタイスカヤ通り)

すこし横道に逸れるが、帰国して1か月近く経った8月20日の朝日新聞を見て心配になった。その記事は、「中国東北地方で大雨被害」とあり、“8月19日までに東北三省で79人が死亡。ハルピンの松花江の水位の上昇が激しく被害拡大のおそれ”とあった。1か月前はあれほど天候に恵まれ、松花江は水を満々と湛えてはいたがまさかこのような状況になろうとは。無事を祈らずにはいられない。

紀念塔の背後は松花江である。全長2308キロと長大であるが、最後はロシアのアムール河に合流する。北朝鮮との国境にある長白山(高さ2691メートル)が源流である。川幅はかなり広く水量も豊富である。中国の河川は日本のような急流は少なく、どの大河もゆったりと流れている。ゆったりと流れるから大雨が降れば氾濫することが多いのであろう。

マイナス30℃となる真冬には、松花江は氷が張り歩いて渡れるようになるらしい。この大河が凍結したらさぞかし壮観であろう。川土手に立つとすぐ川面までコンクリートの長い階段が設けられている。今日は土曜日ということもあるのだろうが、たくさんの人が座っておしゃべりしている。どうやらここから夕陽が沈む美しい光景を見るためのようだ。松花江に沿って幅の広い緑地帯が上流に向かって1750メートルも続いている。これが斯大林(スターリン)公園である。さすがにそこここにハルピンはロシアの影響を見ることができる。

これまでこの公園を散策する機会がなかったのでゆっくり歩く。しばらく歩くと川岸に屋根つきの100人は乗れるような観光船が停泊していて係り

の人がしきりに客寄せしている。聞くともうすぐ出航するというので急いで10元払って乗り込んだ。ハルピン市街を船上から見るのは結構なことであるし、何より川風に吹かれるのも気持ちがいい。丹東市に行った時も鴨緑江で船に乗ったが、船上から見る景色は陸上のそれとは全く違うものである。

船は岸を離れるとまず上流を目指した。頬を撫でる風が気持ちいい。川沿いにある建物は意匠を凝らしたものがいくつもあり、それを見ているだけでも面白い。明日行く予定の「太陽島」にはロープウエーで行く予定だが、その乗り場は欧州の中世のお城をまねたものでひときわ目につく。つまり対岸は緑に覆われた太陽島である。とても美しい。川の真ん中に船が進んだときハルピン市街の方向を眺めた。この時見た夢の中のような光景は忘れることができない。斯大林公園の美しい緑の奥に高層ビルが林立し、どこかの欧米の都市を見るようであった。ビルの上には、真っ白い満月に近い月がすこし赤みがかって来た青空に懸っていた。

30分程度周遊した観光船が桟橋について陸に上がった時、夕陽が太陽島側の陸地に沈んだ。午後8時ころで東京では真っ暗な時間帯である。東京は東経139度に対しハルピンは東経127度であるから当然こうなる。沖縄（東経128度）よりまだ西にあるわけであるから。

さて、本稿の終わりにハルピンとユダヤ人について記しておきたい。前回の旅行の時、20世紀初頭から第二次世界大戦のころまでハルピンには多くのユダヤ人が住んでいたことを知った。なぜこの地にユダヤ人が住んでいたのか気になっていた。今回の旅でいろいろと知るところとなった。

ハルピン市は、1898年までは一寒村で人口は少なかった。それが前述の条約締結後に鉄道の敷設や住宅建設などで一気にロシア人が増加した。1914年には、3万4千人であったのが1925年頃には約9万3千人に増加した。これに対して日本人はわずか3千3百人であった。もうひとつの背景は、1917年のロシア革命を嫌った白系ロシア人がハルピンに押し寄せたのである。ユダヤ人は革命以前から入植していたが、帝政ロシアはユダヤ人の居住制限を厳しくしていったため、自由に居住できるハルピン市に逃れ、2万人にまで膨れ上がっていった。

遊覧船からハルピン市街を望む

ハルピンは、ロシア、中国、日本だけでなく欧米諸国の企業が多く進出し、国際都市の様相を呈してきたが、1940年前後までハルピン経済を支えたのはユダヤ人であったという。前述のモデルンホテルもユダヤ系ロシア人が経営にあたった。しかし、安住の地と思っていたハルピンも情勢が急変し、ハルピンのユダヤ人の大半は命からがらアメリカなどに移住し、安全の地を求めて行った。大きな要因は増加する白系ロシア人の中にユダヤ人を嫌う人が増えて、迫害が年を追うごとに厳しくなったからだという。苦難の道を経てようやく中東の地にイスラエルを建国したのは、1948年5月のことであった。

ハルピン市内には、ユダヤ人が住んでいた証がいくつか残っている。一つは、1918年に完成したユダヤ教の礼拝堂の「シナゴーグ」である。キリスト教やイスラム教の礼拝堂と異なり、2階建て（一部3階建て）の、マッチ箱を大きくしたような建物である。白と茶色のコントラストが人々の目を引く。現在はユダヤ人の足跡を展示する施設となっている。またユダヤ人墓地には行けなかったが、2千人の御霊が眠っているそうだ。墓標が整然と並んで、美しい墓地であるらしい。そのほかにも学校などが残っているが、中国人が別の用途で使用している。

ところで我々は第二次世界大戦時にリトアニアでビザを発給し、多くのユダヤ人を救った杉原千畝は知っている。しかし関東軍情報部長であった樋口少将が（紙面の関係で詳細は割愛するが）この地にいた2万人のユダヤ人が難民となり絶望の淵にいたとき、彼の独断でアメリカなどに逃れさせたことはあまり知られていないのではないか。私も勿論知らなかった。エルサレムの丘には「黄金の碑」があるそうだが、ユダヤ人の偉人に混じって杉原千畝と樋口季一郎の名が刻まれているそうだ。歴史の一断面であるが心に響くことである。

（続く）